

成田狂児

×

岡聡実

GLAY
ヘアー・クレイジー・ラヴ



「HAIRY CRAZY LOVE」side.琴吹

毛の本です。狂児にも聡実くんにも毛が生えています。

体毛苦手な方ご注意ください。

ATTENTION!

※本書は非公式の二次創作物です。下記の行為を禁止しております。

This book is an unofficial derivative work. The following actions are prohibited.

※原作、関係者及び実際の人物等には一切関係ありません。

There is no connection with the original work, related parties, or real people.

※廃棄の際は内容がわからないようにご配慮いただくか、
同人誌専門のリサイクルショップ等にお持ちよりください。

When disposing of the item, be careful not to reveal the contents,
or take it to a recycling shop that specializes in doujinshi.



複写・複製・転載・再配布禁止。
Reproduction, reprint, redistribution.



SNS やインターネット上で共有禁止。
Share on social media or the internet.



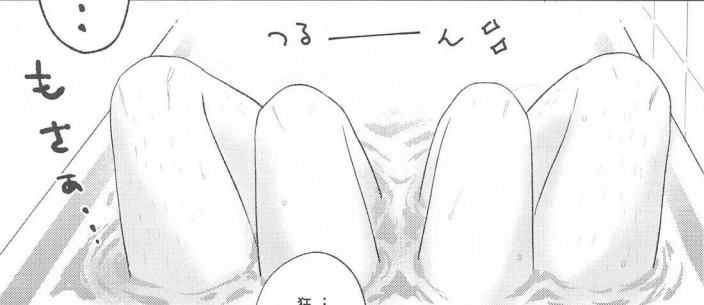
ネットオークションやフリマアプリに転売禁止。
Resell through online auctions or flea market apps.



.....

っる——ん ぽ

も
さ
る.....



.....
狂児さんて

毛まで強いのに、
むかつくわ

ん？

え？
もしかして俺いま
怒られとる...？





ほら
見てください

僕の脚と比べて
狂児さんの脚の毛
ボーボーやないですか

ああ……ごめんな
普段手入れとか
せえへんから

聡実くん
嫌なら刺るけど

や、そういう話と
ちやう



顔も強いのに
毛も強いて

なんていうか……
いろいろ負けた
気分です

ようわからんけど
褒められてるんかな
これ

さしこ



ん……でも

聡実くんの脚
ええやんつるつるで

触り心地ええし

さわ

嬉しい

……っ
おっさんくさ

なんでえ……笑



かゝ

きょう

じ...

つちよ

.....んまた
興奮してきて
もうたん？

さつき
いっぱいって
敏感になつとる
やろしなあ...

ほなこつちも
触ったろ

く ん っ

すきこ

すきこ



コレは
どういふことなん
かなあ〜…

んう…?

ん

ん

もじ…

よう見えへん
かったんで…

…さっき
眼鏡なかったし
いろいろ…

……

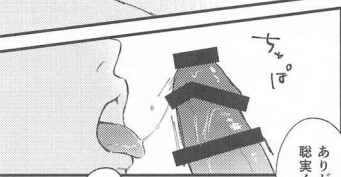
すげやな
あ〜…

うっさいわ

ふ

フッ

すい











はだのあわい

なばな

「ただいまあ、聡実くん。起きとる？」

できるだけ音をたてないように鍵を回し、ゆっくりと扉を開ける。電気がついてるのは部屋の外からもわかったから、きつとまだ起きているはずだ。セキュリティが心もとないこのアパートにもすっかり愛着が沸いた今、彼がいるという証拠の明かりを見ると柄にもなくホッとしてしまう。

遅なるから、先に寝とってええからね。

そう連絡はしたものの、待つていてくれているだろうと期待していたのも本音だ。なにせ今日は、一か月半月ぶりの逢瀬である。

明日は狂児の仕事も、聡実の大学のバイトも休みで、もともと出かける予定を立てていた。それならば、どれだけ遅くなっても今晩のうちに聡実の家に帰っておけば一緒にいられる時間が増えるのではないか。狂児がそう提案したとき、電話越しの聡実の声は珍しく弾んでいた気がする。

「狂児さん、おかえりなさい」

ただいま、おかえり。そのやりとりがすこし照れくさくて、けれども自然なものになってきた今、迎え入れてくれた聡実を抱きしめることに躊躇いはひとつもない。すでに敷かれている布団から立ち上がって狂児のもとへと駆け寄ってくれた聡実を包み込み、ちようどいい高さにある額にちゅつと唇を落とす。

「ごめんな、もうちょいはよ帰れると思ってんけどな」

「お店、忙しかったんですか」

「いや、なんでか顔出す先出す先で捕まってもうてな」

「みんな、狂児さんのうすら笑い真に受けてるんちゃう」

「ええ、うすら笑いて……聡実くんまだそんなん思ってたん？」

ふつ、と笑いながら身じろいだ聡実が、ネクタイをほどいてくれる。名残惜しく感じつつ腕をほどくと、おつかれさまです、と労いの言葉をくれるものだから、体の力が抜けそうになった。

そのままスーツを脱ぎハンガーにかけて畳に座る。すると、そりと近づいて狂児の太ももに跨った聡実の方から、むぎゅ、とハグをされた。一か月半という月日はやはり、寂しさ与人恋しさを募らせてしまっていたらしい。珍しくずいぶんと積極的だ。

「なかなか会いにこれへんかったなあ……」

「しやあないです、すぐ行ける距離ちやうし……」

「ほんまはなんとか時間作りたかってんけど、遅おまではたついで終電間に合わん日ばかりでな」

「僕が行けたらよかったんですけど」

「聡実くんはバイトもしてんねし勉強が本分やろ」

「はい………というか、狂児さん」

「ん？」

狂児の胸板に、眼鏡がかちやりとぶつかった。

こちらに向かって可愛らしい上目づかいを寄越してくる聡実が、やけに狂児の背中や脇腹あたりを執拗に撫でる。ただの抱擁ではない妙な触り方に首をかしげると、聡実は真剣な面持ちで「成長し

ましたか？」とつぶやいた。

「成長？」

「……なんか、大きくなった気がする」

「大きい……アー……？　もしかして、腕とか？」

「え、なんかしてるんですか」

「いやな、忙しかったら飯食うんも遅なるやろ。せやから合間にできる筋トレみたいな始めてん」

「筋トレ」

「宅トレっちゅうやつ。動画とか見ながら」

自分でも正直そこまで変化は感じていなかったし、組の誰からも指摘すらされていない。それなのに、この一瞬、数秒の触れ合いで変化を感じ取ってくれた聡実に頬のゆるみを禁じ得ない。

「そんなんですけど、狂児さんそない太らん体質やん」

「それは聡実くんやろ。俺なんて気い抜いたら一発やで」

ただでさえ、二十五も離れているのだ。いつまでも若く見られたと思うし、できるだけ年齢を感じさせたくない。悪あがきと言えはそうだが、努力させてほしいと思わせてくれる。

「自分じゃそないわからんかってんけど」

「……ん……なんか、きゅっとした気がします」

「できへん日もあつてんで？　えーうれしいな」

「……………狂児さん？」

「うん？」

「見たいから、脱いでみて」

「えっ」

今？　と尋ねた狂児に対して返事はなく、聡実はそのきれいな

指先でシャツのボタンをぶつ、ぶつ、と外していく。上手になったよなあ、と思いがらその一挙手一投足を見守っていると、ワイシャツと一緒にインナーもぐいぐいと脱がされる。

「大胆やな、聡実くん」

「……めつちやムキムキになつとるわけちゃうんや」

「ははっ、そりやそうやろ。そんなすぐならんし……簡単なトレーニングやもん」

べたべたと狂児の胸や二の腕を触りながら、聡実の唇がだんだんと尖っていく。不機嫌というよりも、なにか言いたいことがありそう、そんな表情だ。

「……ええよな、狂児さんて」

「え？」

「なんか……男らしいやん。体格もええし……筋肉も、しっかりしとるやないですか」

「まあ……タツバはある方やけど」

「僕とおんなじぐらいの年るとき、背ってまだ伸びました？」

「えー……どやったかなあ、高校でえらい伸びた気がするけど……う、わ、どこ触つてんの」

二の腕を撫でていた聡実の手のひらが、する、と腕の内側へと滑り込んできた。普段触られることのない場所をたどられて、思わず背中に入力が入る。

「……たくましい、ていうか」

「聡実くんかて、昔と比べたらしつかりしたやん」

「生命力強いねんよな……狂児さんで。ずっと思ってたんですけど、こことか、ここも」

「え？ ちょ、やめてえな」

しつかりと着込んだ聡実とは裏腹に、いまや狂児の上半身は無防備だ。聡実はその狂児の下腹部に手をそろりと這わせ、鼻先を腋へとぐつと近づけた。すん、すん、と明らかににおいを確かめて吸っているようにすぐたさに、情けない声が漏れた。

「さ、聡実くん？ アカシて。俺風呂も入ってへんねんで」

「ん……」

「えー……いや待って、どこにそんな力あんの」

男らしくていいな。そんなふうに言った聡実だつてもう立派な青年で、ときおりこうして狂児を驚かせるぐらいにまで大きくなった。こんなふうに積極的に恋人に跨つて、興奮しているのをみじんも隠そうとしない姿に、ぞくぞくする。

「なあ聡実くん……ツ、ええもんちゃうやろ、普通に……新幹線暑かったし汗かいてん。勘弁して」

「うん……そんな感じ、する……」

「いや、感じる、ちゃうくて。も……ぜんぜん言うこと聞いてくれへんやん」

どんな遠慮がなくなつて、聡実の鼻先がすっかり狂児の腋のくぼみに埋められる。まさかの状況に困惑しながらも、聡実相手に強く拒否ができない。

狂児だつて、聡実の腋のみならず、隅から隅まで可愛がりたいと思つたことは一度や二度ではない。けれど聡実が嫌がるだろうと

思つてその一步は踏み出せずにいたのに。でも聡実がこうして狂児の手入れなんて及んでいないあらぬ箇所を堪能して、その柔らかな肌似合わない毛が鼻先に触れている。

「……汗かいたときの狂児さんより、もつと濃いです……」

どこでスイッチが入つたのだろうか。うつとりしている聡実に、大丈夫か？ と正気を問いたくなる。いくら恋人とは言え仕事終わりの四十路を超えた男の体臭なんてなにがいいのだろうか。

「聡実くん、」

「……狂児さんの……ここもやけど、髭とか……お腹んこととか、毛、好きやねん」

「ちょお、そこで喋つたらこしよば……つ、ていうか、好きて……ええ？ 毛？」

「……なんか、強そうで」

「強そう……」

「僕、薄い方……やんな、たぶん。せやから羨ましいていうか……その、明るいところ見てもうたから、」

薄い布団に寝転がつて、電気を暗くしてセックスをする。色気を孕んだ時間とは違うスキンシップだったはずだ。それなのに今こうして密着しているだけで、体に触れるだけで。狂児への好意をしとどに溢れさせる聡実を、むちゃくちゃに可愛がりたくなる。

「聡実くんの毛、ふわふわで好きやで」

「ふわふわで……毛質なんかな、ああいうのつて」

「せやろなあ、髪の毛もさらさらやしな」

「つ、あ……狂児さん、」

狂児も、聡実が着ているトレーナーをゆつくりとたくし上げる。鍛えているわけではないけれど形のいいきれいな腹筋を撫でると、脱がせやすいように体をすばませてくれた。

「俺の毛は好きにしてくれてええけど、俺も聡実くんに触らせてもらわんと。ずうるいやろ」

「いつも好きにしてるやん……」

「でも一か月ぶりやし。腋舐めとか聡実くん嫌がると思ってたことなかったやろ」

「えつ、舐め、僕そこまでして、うア……つ、う」

あらわになった聡実の腋に、今度は狂児が顔を埋める。全身くまなく洗ってくれたのだろう。ボディソープの香りをまとった肌が、狂児の指先や舌、すべてにしつとりと絡みつく。

「つ……う、あ……舐め、あ……や、」

「ン……ええにおい」

「……つは、う……ん、う」

舌先で、柔らかくて控えめな毛を撫でつけるようにして舐める。唾液を含んで濡れた腋の毛を口の中でちゅぱつと吸いながら、甘さすら感じるような聡実の香りを堪能する。

「うあ……つ……ひつ、す、吸わんと、つて……」

「つは……かわい、ここ。見える？」

狂児は、うずめていた顔を反らして、聡実の腕をぐっと持ち上げた。聡実が自分の目で見えやすいようにしてやると、かあつと頬が染まっていく。

「……は……つ、み、見たない、そんな……つ」

ぎゅうつと目をつむった聡実は、ふる、と弱々しく首を振った。けれども体は確実に高揚しているようで、乳首はツンと勃起、下半身も部屋着をぐっと押し上げて反応している。

「……聡実くん、腋でも感じんねんなあ」

「あう、そんな、ちやう……ッ」

「なんでえ。ええやんか、どこでも気持ちよくなれて」

えらいなあ、と囁くと、目じりを赤く染めた聡実がそろりとまぶたを開ける。

「聡実くん、ズボン脱いで」

「……つ」

「俺も脱ぐから」

狂児が自らのベルトのバックルに手をかけると、聡実はそろりと狂児の上から離れ、緩慢な手つきでズボンを脱いだ。下着も同じようにと視線を送ると、勃起した性器を隠していた布切れが畳のうえにぱさりと落とされる。

「……もっかい、ここおいで？」

脱いだスラックスと下着を適当に放って、聡実を手招きする。もう一度、あぐらをかいた狂児の上に跨った聡実にキスをする。

お互いに勃起上がった性器をぐいぐいと押し付けると、濡れやすい聡実のペニスからとろとろと溢れているカウパー液が狂児のペニスにまで伝って、濡れていく。

「……あ、う……」

「……こうやってくつついたら、俺と聡実くんの、ぜんぜん違うんようわかるなあ」

「は、あ……ほんまや……狂児さんの、」

「こく……つと、聡実の喉ぼとけが上下する。

擦り合わせっている性器の色や形、絡んでいる陰毛の質感がまるで違っていて、やけに興奮を煽られる。しつかりと男性らしいのにどこもかしこも可愛くて、狂児に触れられることでよろこびを感じているのがたまらない。

「つ……狂児さん……も、う……触って……」

「ん、一緒にしよな」

「あ……つ……」

聡実の性器の先っぽを親指でくりくりと弄ると、尿道に溜まっていたカウパーがまたさらに溢れてきた。それをすくって、雁首のあたりぬるぬると塗りたくる。そして互いのものをまとめて握り、ゆるゆると手淫を始めた。

「つ……つ、ふ……う……つ」

「聡実くんも、握って、」

「……つ、うあ、あ……、うん……」

「ツ……こすれて、気持ちええ、な……」

「は……つ、う、う……きつ、きもち、い」

こんなすぐイってまう、と、狂児の肩に「っん」と頰をぶつけた聡実が声を震わせた。すぐにイけがいいし、何回だってイかせてあげたいし、聡実の望むこと、好きなこと、どれもこれもしてあげたいし受け入れたくなる。

ぐにぐにと性器同士が擦れ合って、じわじわと快感が高まっていく。互いが触れていないところを指先でくちゅくちゅと抜くと、

聡実の嬌声が甘くとろけていく。狂児もなんとか呼吸を整えつつ、どんな精液が上がつてくるのがわかった。

「つ……つあ、う……きよ、じ……ッ出る……っ」

びくびく、と体を揺らし、聡実の性器から白い液体がびゆる、と溢れ出した。狂児の手のひらでは覆いきれなかったそれがつう、と達したばかりのペニスを伝い落ちていく。

先走りと精液で、濡れそぼっている聡実の毛を、指先に絡めとる。

「あ、あ……い……い、つてもうた、」

直接性器に触れているわけではないのに、射精後の敏感な体は、毛に触れるだけでも感じてしまうらしい。

「……こつちも濡れたとき可愛いなあ」

「つふ……つきようじ、さんは……」

「ん……俺はなあ、もおちよい……」

聡実が、がちがちに勃って腹に付きそうになっている狂児の性器をぐちゅ、と握りこむ。そしてもう片方の手で、へその下、下腹部まで生えている毛をそろりと撫でられた。どうにも今日は、そういう気分らしい。

「……ここも、聡実くんは生えてへんなあ」

聡実の、なめらかで薄くて白い腹を、狂児も同じように撫で返した。へそのあたりをぐ……つと押し込みながら、真つ赤な耳を食む。

「……俺のん入れたら、このへんまでくるんやつけ？」

「アッ……？　　う……つ、う……つ、あ、あ……」

この先を想像しただけで二度目の絶頂を迎えそうな聡実の、射精したばかりの性器がびくんと揺れた。

成田狂児

×

岡聡実

R18
ADULT ONLY

KARAOKE IKO! & FUAMIRESU IKO.
UNOFFICIAL FANBOOK

ヘアリークレイジー・ラヴ

<<< Side. MANI



「HAIRY CRAZY LOVE」side.まに
毛の本です。狂児にも聡実くんにも毛が生えています。
体毛苦手な方ご注意ください。

ATTENTION!

※本書は非公式の二次創作物です。下記の行為を禁止しております。

This book is an unofficial derivative work. The following actions are prohibited.

※原作、関係者及び実際の人物等には一切関係ありません。

There is no connection with the original work, related parties, or real people.

※廃棄の際は内容がわからないようにご配慮いただくか、
同人誌専門のリサイクルショップ等にお持ちよりください。

When disposing of the item, be careful not to reveal the contents,
or take it to a recycling shop that specializes in doujinshi.



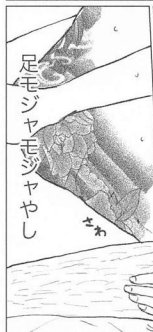
複写・複製・転載・再配布禁止。
Reproduction, reprint, redistribution.

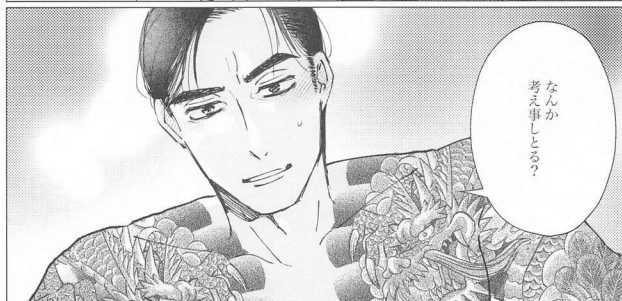


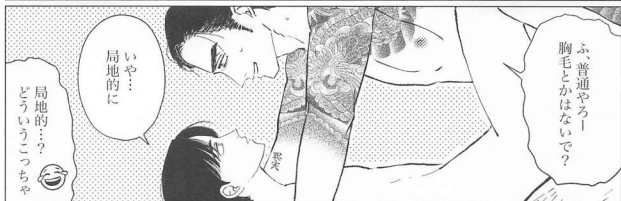
SNS やインターネット上で共有禁止。
Share on social media or the internet.



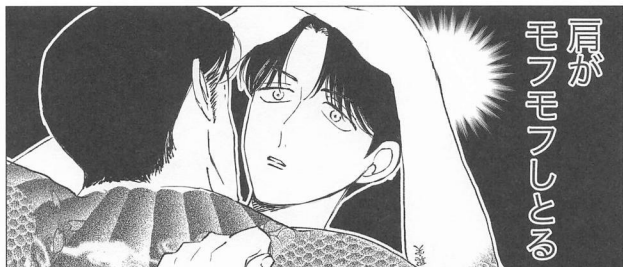
ネットオークションやフリマアプリに転売禁止。
Resell through online auctions or flea market apps.

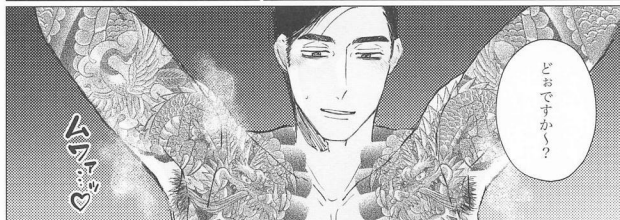




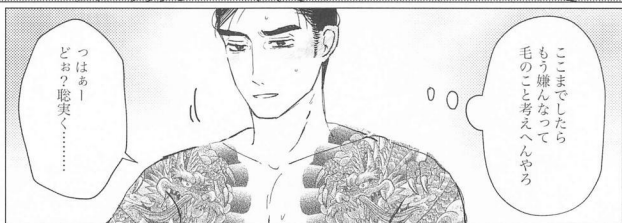






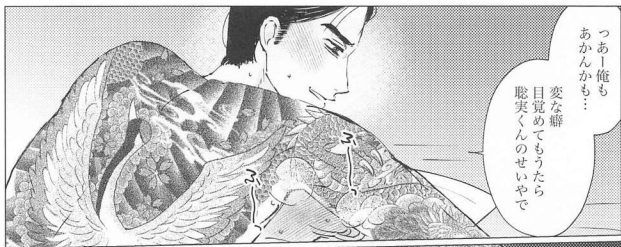


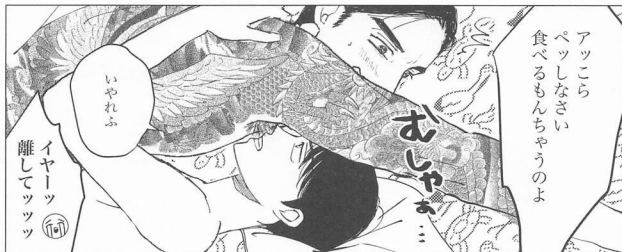
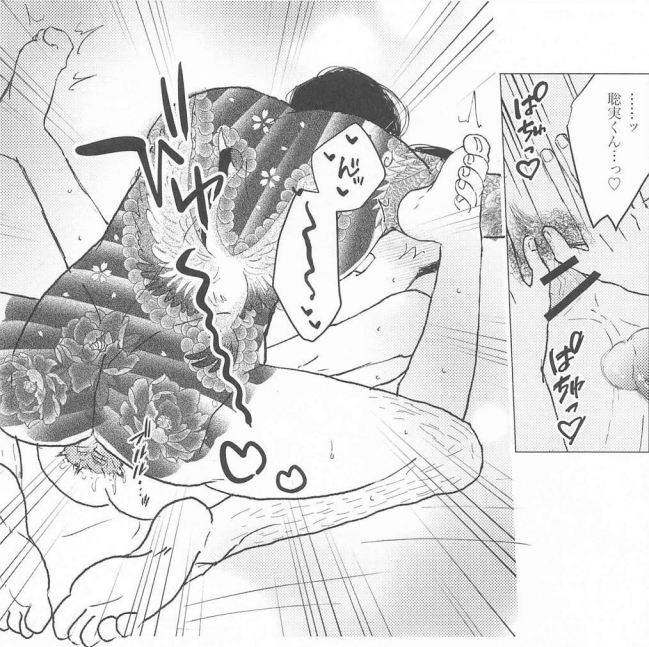
















発行日:2025/1/26 マイク回して！6

琴吹 @kotokoto_1925

まに @mani_kf0000

ゲスト寄稿(関西弁監修) なばな @nbn26bnn

連絡先:

琴吹 kotokoto.toastegg@gmail.com

まに you.02mft@gmail.com

印刷所:栄光

Special thanks

表紙デザイン 特売さん @tokubuyiko
